

リオ・2016とブラジルの自信

神戸大学経済経営研究所

浜口 伸明

2016年のオリンピックがリオデジャネイロで開催されることが決定された。東京の落選は残念であったが、2000年から2003年にかけてリオで家族とともに研究生活を送った私は、このニュースを喜ばしい思いで聞いた。

ブラジルにとっては2014年に開催することが決定しているサッカー・ワールドカップに次ぐ国際スポーツイベントとなる。「南米で初めてのオリンピック」というスローガンは、非常に効果的で、東京を含む先進国はこれを超える意義を見つけられなかった。招致の顔となったペレは世界で最も知名度の高い人物のひとりといってもいいだろうし、ルーラ大統領はオバマ米国大統領をして「地球上でもっとも人気者の政治家」と呼ばしめたカリスマ的存在で、新興国・発展途上国のリーダー的存在でもある。また、リオは、その美しい風景、サンバやカーニバル、幾多の名プレーヤーを生んだサッカーなど、世界中の人を引き付ける街の顔を持っている。オリンピックを開催して人々が集う街として選ばれる資格は十分だろう。

リオはブラジル人にとっても誇りであり、憧れである。リオを讃えた歌は数多いが、代表的なサンバ「素晴らしき街」(Cidade Maravilhosa)は今やリオの代名詞でもある。

魅力にあふれる／素晴らしき街／ブラジルの心／

私たちの心の歌／サンバの揺りかご／

いつも陽気に歌う／私たちの心の聖地

また有名なボサノバの作曲家であるアントニオ・カルロス・ジョビンは、「飛行機のサンバ」(Samba do Avião)で旅から戻って飛行機がリオに着陸する前のはやる気持ちをこのように歌っている。

リオが見えると／私の魂が歌う／耐えられない懐かしさ (サウダージ) ／

リオの海／果てしなく続く砂浜／リオは私のために作られた／

コルコバードのキリスト像／グアナバラ湾に向かって両手を広げて／

このサンバは私の純粋なリオへの愛／

褐色の肌の女の子が全身を震わせて踊るだろう／

太陽と空と海のリオ

この歌はもともと航空会社のCMソングだったが、現在ではジョビンの名はリオ国際空港の名称に冠されて地元の人々に讃えられている。私も滞在の終盤ごろにはジョビンのサウダージを少し共感できるようになっていた(私のために作られた、とまでの思い入れには至らなかったが)。

しかし、これだけの要素を持ちながら、リオは長い停滞に直面してきた。きっかけは1960年に行われたブラジルへの遷都であった。産業都市サンパウロに対して政治面で主導権を発揮してきたリオは、残存した政府機能に依存するだけで何も生み出さない、税金で支えられた街となった。観光は目玉産業であったが、豊かな観光資源に頼りきってインフラ投資を怠った。こうした問題の積み重ねで、雇用が不足して経済は停滞した。リオのどこどころある岩山の山肌にびっしりと広がるファヴェーラと呼ばれるスラムはリオのもう一つの顔でとなった。そこには、かつて映画「黒いオルフェ」が描いた貧しい人々が肩を寄せ合って暮らす庶民の町の姿はなく、最近の映画「シティ・オブ・ゴッド」が見せた、麻薬や武器取引などの組織的犯罪の温床となって一般市民と隔絶された世界だ。当然、市内の凶悪犯罪発生件数も多い。

私の家族がリオに住み始めた時はそのような問題が最悪の状態にあったのではないと思う。リオは確かに飛行機で上空から見るとあまりにも美しかったが、街に立ってみると、下水が路上にあふれ、道路はいたるところで穴だらけであるし、どこでも周りの様子をうかがいながら歩かなければならないほど、治安の悪さに気の休まることがなかった。最も一般的な公共交通手段である市内バスは、乗客を狙った強盗・窃盗事件が多発するため、利用しないようにと日本人の集まりで忠告を受けたことを覚えている。自慢の海も処理されない生活排水が放出されて汚染され、ところどころで悪臭を放っていた。勤め先の大学の同僚も、近年の状況には失望を隠せず、60年代の古き良き時代を懐かしむ話ばかり聞かされたものだ。

しかし、停滞していたブラジルを象徴していたリオも、近年上向きのブラジル経済の恩恵を受け始めたようである。なかでも、リオ近海に大規模な海底油田が次々に発見されて、そのロイヤルティ収入で経済は潤い始めた。新しいビルも建ち始め、インフラの改善にも前進がみられるようになった。2007年にはパンアメリカン大会を成功させ、実績を築いた。ブラジルでもやれるんだ、と、存在感のあるブラジルの回復を願い続けたルーラ大統領はリオ・オリンピック決定の瞬間、涙を流しながら関係者と抱き合っただけで世界に認められた喜びを爆発させた。リオが輝きを取り戻すことは、ブラジルが自信を取り戻すことなのである。

7～8月のリオは冬にあたる（20度を下回ることはほとんどないが）。日中は30度を超えるが、朝夕はすごしやすく、そのころ夏を迎える欧米や日本よりもスポーツにも観光にも適しているだろう（ビーチを楽しみたい人にはちょっと寒いくらい）。オリンピックの最終種目のマラソンは、毎年行われるカーニバルのパレード会場がゴールになるらしい。リオを象徴するその場所で、市民もオリンピックを成し遂げたゴールを、達成感とともに迎えられるだろうか。治安やインフラの問題など、課題は山積しているが、ブラジル人がこのチャレンジに取り組む様に注目してゆきたいと思う。